

そっ たく

学問のすすめ

平成30年9月1日刊行 No.14

編集・発行 大島町教育委員会

教育文化課事務局

TEL04992-2-1453

題字「井島 吉春」

「学問のすすめ」

教育長 谷 口 浄

「学問のすすめ」という本を読みました。この本の最初に「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」という文が出てきます。この言葉の意味は、「天が人を生み出すに当たっては、人はみな同じ権利を持ち、生まれによる身分の上下はなく、万物の霊長たる人としての身体と心を働かせて、この世界のいろいろなものを利用し、衣食住の必要を満たし、自由自在に、また互いに人の邪魔をしないで、それぞれが安楽にこの世をすごしていけるようにしてくれている」ということであります。しかし、この人間の世界を見わたしてみると、賢い人も愚かな人もいる。また、社会的地位の高い人も、低い人もいる。こうした雲泥の差と呼ぶべき違いは、どうしてできるのだろうか。その理由は非常にはっきりしている。「実語教」という本の中に「人は学ばなければ智はない。智のないものは愚かな人である」と書かれている。つまり、賢い人と愚かな人の違いは、学ぶか学ばないかによってできるものなのだ。と本の冒頭に書かれています。

この本を書いた人は、皆さんが大好きな一万円札の肖像画にもなっています。「福澤諭吉」(1835から1916)(66歳没)。先生は、啓蒙思想家、作家、教育者、北里柴三郎の伝染病研究所設立に協力、現慶應義塾大学(「義塾」には社会に貢献する人材を育成するという意味が込められている)の創始者であり、「学問の父」といわれることで広く知られた人である。また、海外の文化を積極的に取り入れたことで、日本の近代化、文明開化の立役者にも大きく貢献し、一方、国家と個人の関係を見つめ、世のために働くことで自分自身も充実する生き方を示したのである。愉快なところはというと、幼少の頃から大酒飲みでヘビースモーカーであったというが果たしてどうだろう。居合の達人でもあり若年の頃より立身新流居合の稽古を積み、成人の頃に免許皆伝を得て、晩年まで一日千本以上抜いて居合日誌も付けていた。正に「文武両道」の人物であった。代表的な言葉で戒名にも用いられた言葉が「独立自尊」である。その意味は「心身の独立を全うし、自らその身を尊重して、人たるの品位を辱めざるもの、之を独立自尊の人と云ふ」とあります。先生を知らば知るほど、もっと知りたいと思う気持ちが湧いてきます。

「学問のすすめ」が書かれたのは、1872年(明治五年)。学制(日本最初の近代的学校制度を定めた教育法令)が公布された年から1876年にかけて全十七編の分冊として発行され、1880年に合本一冊の本として出版されました。当時の大ベストセラーになり、人々の意識に多大な影響を与えたとされています。それから146年が経過していますが、内容は今の時代にも通じるものがあり、深く心打たれて、勇気がわいたり、人生の指針や人間の根本にせまるものがあります。

諭吉先生は、近代日本を代表するリーダーの一人であり、斬新的で人間の生き方はどうあるべきかを考えさせ、時代の先を読む「先見の明」を持った人物であったのでしょ。現在もその思想は高く評価されているのですが、現実には若い人たちは「学問のすすめ」を読んでいる人は少なく、文語体で書かれていて読みづらい。というのが理由の一つといわれています。今は現代語訳がたくさん出版されているので、中学生でも読みやすくなっています。

「心訓七則」(真の作者はいまだ謎ですが、福澤諭吉が残した言葉)

一、世の中で一番楽しく立派なことは、一生を貫く仕事を持つことである

- 一、世の中で一番みじめなことは、教養のないことである
- 一、世の中で一番さびしいことは、仕事のないことである
- 一、世の中で一番みにくいことは、他人の生活をうらやむことである
- 一、世の中で一番尊いことは、人に奉仕して決して恩を着せないことである
- 一、世の中で一番美しいことは、全てのものに愛情を持つことである
- 一、世の中で一番悲しいことは、嘘をつくことである

他人をうらやまず一生懸命に勉強をして、世のため人のためになる仕事をしようという気持ちになります。常に心に刻んでおきたいものです。

私も、高校生の時だったと思いますが、親父に「人生はいかに生産していくかにある」と一言で言われたことがあります。ただ生きているだけでもそれはそれで大変なことではあると思うが、生きているのであればどう生きるか、少しでも頑張りたい、人の役にもたちたい。一日をどう過ごすか、一年後、十年後に自分も社会も変化している中で、その志に向かって努力してきたか、ということが大事なことではないでしょうか。どの様な状況にあっても、常に目標をもってそのことを進める意欲が必要であり、価値観も人によって様々である。結果が大事だという人もいれば、過程が大事という人もいて、それぞれの評価は分かれるところです。人が生きていくという過程の中で大切なことは、その日、その時、その一瞬を無駄にしないということかも知れない。人生というのはその一つひとつの積み重ねであると思うこの頃であります。

見上げた空の色 (その2)

教育長職務代理者 山田 三正

「見上げた空の色を忘れるな。芝の感覚を忘れるな」

サッカーワールドカップロシア大会ベスト8を懸けて惜敗した、日本代表西野監督の言葉です。強豪ベルギー代表をあわやというところまで追い詰めながら、逆転された選手たちへの言葉です。精一杯戦った選手たちだけでなく、ベンチで控えていた選手たち。そしてスタッフにもかけたのかもしれませんが。ベスト16というステージまで上がり、戦い破れました。その後うつむいた顔を上げた者のみしか、空の色は見られません。そして、グラウンドに倒れこんだ者しか、背中にあたる芝は感じられません。いつもの青空であり、いつものグラウンドの芝であるのに。これまでの練習そして試合中の精一杯の努力や思いが、見上げる空の色を変え、芝の感覚を変えます。どんな色に見えるか、当人にしか見えない色です。

大島海洋国際高等学校のカッター部が第20回全国水産・海洋系高等学校カッターレース大会で見事優勝しました。すばらしい快挙です。去年の準優勝から1年間を経てつかんだ栄光です。カッターの上から見上げた空の色はどんな色だったのでしょうか。

大島高校野球部の夏の都大会一回戦の応援に行きました。雲間にところどころ見える青空の下で選手たちが躍動しました。見事勝利の後に見上げた空の色は何色だったのでしょうか。春の大会は選手不足で出場できませんでした。その間も同じ空の下で練習に励んでいました。そのとき見上げた空の色はどんな色だったのでしょうか。物事がうまくいかないときの空はドンヨリした感じでしょうか。苦しいさ、つらさだけが強くなる糧とは思いますが、試合場にたつ時、少なくとも乗り越え、耐えたことへの自信がつくと思います。そして、顔を上げて見上げる空に明るい光、次のステージへの夢を見てほしいとおもいます。

子供たちが勉強、スポーツ、行事などいろいろな体験をしています。そのすべてが挑戦だろうと思います。ひとつのスポーツや学問に絞って突き進みその先の空の色見るために努力を重ねる事はすばらしいです。是非挑戦し続ける力を身につけてほしいと思います。

夢途中の悔しさの中で、見上げる空に次のステージの輝きと希望の色を見る。輝きと希望を見出す努力をする。子どもたちはこの夏の空にどんな色を見たのでしょうか。

導く

教育委員 井島吉春

ある少年が野球の打撃フォームを変えたら打てなくなった、前のフォームの方が打ちやすいと言うのでどんなフォームなのか見せてもらおうと、どちらの打ち方も特に変ではないので打ちやすい方で打てば良いだろうと言うと、それはできないと言う。なぜだと聞くと指導者の言う通りにしないと怒られるとのこと。それなら試合の時に最初は教えられたフォームでかまえ、打つ時に打ちやすいフォームにして打てばいいんじゃない、もしヒットが打てれば怒られないだろうと言うと、そんなことぜったいできない、ヒットを打っても怒られると渋い顔をした。

たとえ怒られても結果を出せば、その内そのフォームを認めてくれるだろうから怒られる覚悟でやった方がうまくなると思うよ、と言おうとしたが、まてよ自分も遠い昔に部活の指導は絶対で逆らうことなどできなかつたな、今でもそうなのだろうと少年の心中を察してしまった。これは部活経験者の共通認識だと思うがどうだろう。

しかし今大人になって考えてみると、教えられた打ち方でダメなら自分で工夫するべきでそもそも指導者の言うことが必ず正しいとはかぎらない。

そんなじっくりしない気持ちでいた時に「星野くんの二塁打」という道徳の教材のことが新聞に出ていた。知っている人も多いと思うが、ある野球の試合で監督から犠牲バントを指示されながら星野君はバットを振って二塁打となりその試合に勝つことができ選手権大会出場を決めた。しかし後日監督からみんなの前で指示に従わなかったなど叱られ、その後の試合には出してもらえないという内容だった。

今年度から教科化された道徳だが、教材の使い方によってはいろいろと問題も起こりえる。何が正しいのか、他の人の考えはどうなのか、ほんとうにこれで良いのかなど悩みながらも自分で考えて答えを見つけてゆけることが大事で、型にはまった人間を作る教育は危険ではないか。

日大アメフト部の事件は悲惨な事件だったが恐怖支配の部活や教育などあってはならない。私は「指導」ということばになぜか厳しさを感じるので「導く」ということばの響きの方が好きだ。どこか愛情のようなものがあるように思えるからだ。現場の先生方もいろいろ葛藤しながらも子ども達を大切に導いてほしい。言うまでもなく家庭でも地域でも同じように。

テレビの役割

教育委員 岡山 日出子

先日ロシアで開催された、サッカーワールドカップのアイランド対アルゼンチン戦でアイランドのテレビ視聴率が95%を超えていたと紹介されていました。残りの数%は選手と応援席にいた人たちだろうとも。そこまででなくても日本戦も大勢の人がテレビを通じて応援していました。このような国際大会やオリンピック等は別にして、テレビで毎日の番組や情報を得ている人がどれくらいいるのでしょうか。

私は仕事から帰ると今日はどんなニュースがあったのか、明日の天気はどうだろうとテレビをつけるのですが、夫が使っているテレビはほとんどネット配信サービスの画面だし、一人暮らしの息子のテレビはゲーム専用。情報も天気もパソコンやスマートフォンで十分だそうです。我が家だけでしょうか。

一昔前はテレビを囲んで番組やTVゲームで一喜一憂していましたが、今は個々のスマートフォンやパソコンが同様以上の機能を持ち多くの人に常用されています。どんどん画質や性能が向上しているテレビですがその役割も変化しているように思えます。媒体の一つとしてとらえている人が増えてきているのを感じました。

やる気は楽しさと希望？

教育委員 山本忠夫

スポーツを見るのもやるのも好きな私は、子供の頃から「どうやったら上手くなるのか？上手い人と自分との差とは何なのか？」にとっても興味があった。そう思うきっかけって何だったのだろう？

私には、4歳上の姉がいる。スポーツが得意でよくその現場に私を連れて行ってくれた。小6の頃だったように思う。その時に見た大人の真剣な表情、悔しそうな表情、そして、終わったあとの心から楽しそうな笑顔。それにすごく興味を持ったのがきっかけだったのかもしれない。

そのスポーツを大人の方と一緒にやると、教えてくれたり、出来ると一緒に喜んでくれる…。それがすごく楽しかった。子供の私を子供扱することなく、ルールのもとに大人と一緒に楽しむ。子供としてではなくひとりの人間として扱ってくれている嬉しさ…漠然であるが、その当時はそんな嬉しさがあったのかもしれない。先生に叱られることも多かった自信のない私であったが、大人になるのは辛いことばかりではないのかも…とちょっと希望を感じたのかもしれない。

そんなことで子供の頃からそのスポーツを通して少しずつ自信を持ち、その後の生き方に繋がっていったのではないかと思っている。子供のやる気を引き出す…。今は子供たちと一緒にスポーツを楽しみながらそんなテーマを考える。

最初は子供の興味のありそうなものを一緒にやってみる。こちらから色々と仕向けてみるのも良い。そして大人も一緒に大いに楽しむ。偉そうにすることなく、こびることもなく、子供を一人の人間として対等に接する。そんな子供たちに対し、大人が楽しそうに未来の夢を語る。それが楽しい。

私の恩師の言葉 「夢を語る指導者がいて、夢を叶える子が育つ」

そんなことを教えてくれた先輩方に、この歳になって今更ながら感謝している。

教育委員会カレンダー 9月～3月

月	日	内 容	場 所
9	9	ジュニアスポーツフェスティバル	都立大島高等学校体育館等
10	7	大島町体育祭レクリエーション大会 予備日 10月8日(月)	つばき小学校グラウンド
	25	就学時健診	開発総合センター他
11	4	大島町体育祭 駅伝競走大会	大島全域
12	4	大島町立小中学校連合音楽会	開発総合センター2階大集会室
	26	雪国体験学習(12月29日まで予定)	新潟県上越市大島区(予定)
1	5	成人式	開発総合センター2階大集会室
	18	大島町立小中学校連合作品展(22日まで)	開発総合センター2階大集会室
2	2	大島町体育祭 野球大会(小学生の部)	差木地地域センターグラウンド
	17	大島町文化祭 芸能大会	開発総合センター2階大集会室
3	1	大島町文化祭 作品展(3日まで予定)	開発総合センター

※柔剣道大会につきましては調整中

※啐啄(そったく)とは

鳥の卵が孵化しようとするとき、殻の中で雛鳥が外に出ようとして内からコツコツ殻をたたく音を「啐」といい、母鳥がその孵化の瞬間を悟り、殻の外をコツコツつき破ることを「啄」といいます。この啐と啄の呼吸が合うとうまく殻が割れ、丈夫な雛が誕生しますが、どちらか早すぎても遅すぎても良い雛は生まれません。教育も教わる側の生徒と教える側の先生が、啐・啄同時である事が理想であり、依って大島町教育委員会便りを『啐啄』と名づけました。